阿佐ヶ谷日記

外村 繁

阿佐ヶ谷日記

繁

ABC 10×20

阿佐ヶ谷日記
一九六
一九六
著者
發行
發行
東京
電話
振替
塚田
定價

阿佐ヶ谷日記

昭和三十五年八月――三十六年七月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

夏の日

私の家の小庭には、今、白い百日紅が咲いてゐる。百日紅の花は、小さい花が神樂鈴のやうに群つて咲く。花瓣は縮れてゐて、白い鹿子絞りのやうである。

盛んにきりぎりすが鳴いてゐる。このきりぎりすは松尾夫人が持つて來てくれたもので、私はその蟲籠を隣室の長押に吊つておく。きりぎりすの鳴き聲は極めて單調で、假りにもきれいな聲とは言ひがたい。が、眞夏の晝下り、この蟲の音を聞くと、夏野の草いきれも想ひ出されて、懷しい。

私の仕事机の横には、妻の病床が敷いてある。この二月、私の妻は乳癌に罹り、左の乳房を切除した。が、癌の發見がかなり遲れた模樣で、癌は

頸部にも轉移してゐたので、再手術し、更に放射線の治療を受けた。四月、妻は、退院したが、放射線で燒かれたため、手術の傷口が癒着せず、毎日、病院へ通つてゐる。

六月に入ると、放射線で頸部の神經を痛めたためか、妻は疼痛を訴へるやうになつた。七月に入ると、妻の疼痛はますます激しくなり、殊に床の上に横になると激痛が起るらしい。夜は鎭痛劑を服用して、どうにか二、三時間の睡眠をとるやうであるが、朝、私が目を覺した時には、机の上に枕をのせ、その上に顏を伏せてゐたり、床の上で朝刊を見てゐたりしてゐる。本病の方は今のところでは異常はない由であるが、暑さや、睡眠不足や、激痛のため、かなり我慢强い妻ではあるが、時時たまりかねたやうに悲鳴を上げる。私も身を切られるやうに辛いが、どうすることもできな

い。

しかし八月に入ると、妻の疼痛は徐徐にではあるが薄らぎ始め、この頃では鎭痛劑を用ひないでも、床の上に横になれるやうになつた。

「お父さんがゐてくれなかつたら、どうだつたでせうね」

「いや、ほんとによく我慢したよ」

私はさう言つたが、語尾が危く涙ぐむのを、どうすることもできなかつた。私の先妻は五男一女を遺して亡くなり、今の妻は二度目の妻である。

今日も私は机に向かつてゐる。その傍の床の上で、妻は雜誌を讀んでゐる。今日も暑さは嚴しく、手に汗がにじむので、私は原稿用紙の上に紙を當てて仕事を續けてゐる。やがて妻は輕い寢息を立てて、眠入つたやうである。依然として、きりぎりすは鳴き頻つてゐる。

夏はこべ

私は五羽の白い十姉妹を飼つてゐる。その十姉妹のため、毎朝の散歩の歸りに、はこべを摘むのが、永い間の私の習慣になつてしまつた。通勤を急ぐ人人の手前、些か氣恥しくなくもないが、五十男の佗しさと見捨ててもくれるだらう。

はこべには葉が圓く、莖が青いのと、葉が三角型で、莖に赤味を帶びてゐるのと二種類ある。が、前者は春、秋のもので、夏期は專ら三角葉のものである。私はそれらのはこべの生えてゐるところを大體見當をつけてゐて、一ところで根こそぎ摘み取るやうなことをせず、あちらこちらと摘み歩く。さうして私にはそれが結構樂しいのである。が、時にはすつかり搖

り取られてゐて、がつかりさせられることもある。

ところが先日のことである。いつものやうに心覺えのあるところへ行つてみると、草はきれいに搔られてゐるのに、一叢のはこべだけが取り殘されてゐるのである。私のことを意識しての上のことか、どうかは知る由もない。しかしそのはこべ草のあたりに、暖い人の心も殘されてゐるかのやうで、その日一日中、私は何となく嬉しかつた。

再發？

一昨昨年、私は「上顎腫瘍」といふ病氣にかかり、入院して、放射線の深部治療を受けた。後になつて、癌であることを知つたが、病氣は醫者の方が驚くほど順調に回復した。しかしそれ以來、私は毎週一日病院へ通つ

てゐる。

口腔外科の診察室は三階にある。私は診察臺に腰かけ、窓外のすずかけの葉が一枚美しく黄葉してゐるのをぼんやり眺めてゐた。擔任のT先生がいつものやうに私の口中を洗滌してゐたが、ふとその手を止めて、獨言のやうに言つた。

「少し、傷ができてゐる」

しかし私は少しも意に介することはなかつた。やがて治療は終つた。が、私が一禮して立ち去らうとすると、T先生が言つた。

「念のために、寫眞をとつて下さい。では、明後日にまたいらつしやつて下さい」

私は言はれた通り口中のレントゲン寫眞をとり、翌翌日、病院へ行つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

T先生はその結果には一言も觸れず、いつもの通り口中の洗滌を始める。

「いつまでも暑いですね。でも、ここは風通しがいいから、助かりますよ」

漸く處置を終つた時、突然、T先生が言ふ「ああ、丁度、Nさんが來ました。念のために診てもらつて下さい」

放射線科のN助教授である。一昨昨年の入院中も世話になつた人である。N助教授は私の口中に鏡を當てて視診しながら、T先生と頻りにドイツ語を交へた會話をしてゐる。その結果、私は細胞の檢査を受けることになる。第一口腔外科のS先生によつて、私は上顎の粘膜を採られ、プレパラートが作られる。發病の時と全く同じである。私はすつかり觀念してしまつた。

しかし奇妙なことに、私はそれほど打擊を受けなかつた。妻の入院した

病院で、この病氣の殘酷さを知りつくしてゐる私が、この病氣を輕んじるわけは毛頭もない。が、私にはあまり不安もない。むしろ乳癌を病む妻と苦しみを共にし得る、喜びにも似た感情が心の隅に湧かないでもなかつた。しかし私はそれがひどくエゴな感情から發してゐることに氣がついた。

つまり私は内心妻に死に後れることを恐れてゐたのである。その悲しさは先妻を亡くした私は、知り過ぎるほど知つてゐる。極めて愚かなことではあるが、死が恐しいのは、死そのものではなく、愛するものとの永別が私には恐しいのである。

愛するから樂しいのである。が、樂しみがあるから苦しみがある。喜びがあるから、悲しみがあるのである。が、死ねば、樂しみも、喜びもない

かはりに、苦しみも、悲しみもない。悲しみは生き殘つたものだけのものである。私は身勝手にもその悲しみを窃かに妻に押しつけることができるかも知れないと思つたのである。

更に私の病氣が再發すれば、手術して間もない妻に與へる衝擊は强いだらう。しかし假に私が再發を欲しても、欲しなくても、所詮、私の力ではどうなるものでもない。私は例によつて自己放棄を試みる。つまり病氣は醫者任せ、運は天任せ、である。さうして明日、私は病院へ檢査の結果を聞きに行くより他はなからう。

今日も殘暑が嚴しいが、門前の櫻の落葉がめつきり多くなつた。きりぎりすはまだ元氣で、鳴き頻つてゐる。庭の隅でこほろぎも鳴き初めた。その鳴き聲は高低のない短い撥音であるが、あの一氣に鳴き上げるやうな、

美しい音色が聞かれるのも、さう遠いことではあるまい。遠く、法師ぜみの聲も聞えてゐる。

ガン・フーの一日喜び

細胞檢査の結果はマイナスであつた。私はさすがに嬉しかつた。歸宅を急ぎながら、思はず微笑が洩れたりした。

私より遲れて、病院から歸つて來た妻は、書齋に入るなり言ふ。

「どうでした」

「心配ないやうだ」

「まあ、よかつた」

私の机の横に敷いてある病床の上に、妻は初めて坐つた。

「でもね、放射線科へも廻つたが、喉にあるぐりぐりの方ね、A教授つたら、暫く様子をみて、場合によつたら取つてしまひませう、なんて、言はれたよ」

妻の手術の跡はまだ癒着しないが、大分淺くなつたらしい。また神經の痛みもよほど輕くなつたやうである。私達のやうなガン・フー（癌の夫婦の意で、妻の命名である）にとつては、まづはめでたし、と言はなければならないだらう。

しかし危機は少しも去つたわけではない。むしろ一日一日、危機に近づいて行く感じである。累卵の危さである。

人間の生命は極めて不安な狀態の中に存在する。人間はいつ生を失ふか知れたことではない。昔から、私の老母はそんな不安な狀態を「一日喜

び」といふ言葉で表現したものである。しかし健康な人は口ではさう言つてゐても、なかなか實感できるものではない。そこへいくと、私達のやうなガン・フーは文字通り「一日喜び」である。しかしそれだけに私達の一日の喜びは強く、二人の愛情は少しも鮮度を落さない。從つて私達の一日一日は極めて充實してゐる、とも言へなくもない。

しかしこれほどの危機の中にをりながら、心のどこかに「なあに、大丈夫」、少くとも「大丈夫かも知れないぞ」といふ氣持がないとは言へない。が、よく考へてみると、これは誠に有難いことのやうである。

生活の音

朝、胡瓜の餌をやりに行くと、きりぎりすが死んでゐた。昨夜はかなり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong